



連続歴史講座

祈りと祭りの考古学



2016年10月8日(土) 13:00~
愛知県埋蔵文化財調査センター2階研修室

弥生の農耕祭祀

永井宏幸

キーワード：第2の道具、トリ・シカ・イノシシ、筒形容器、一色青海遺跡

人間が創出してきた道具はさまざまである。これを3つの道具にわけてかんがえると、道具の関係性が理解できる。日常的な道具は「第1の道具」、精神的な道具は「第2の道具」(小林1977)、そして私は情報伝達の道具として「第3の道具」を提案している(永井2013)。今回は「弥生の農耕祭祀」を主題として、弥生の「第2の道具」を取りあげて2000年前の「第3の道具」に迫りたいとおもう。

弥生時代は稲作文化が伝来し、縄文時代以来の狩猟採集に加えて本格的に食料生産を開始した時代である。弥生時代以前からシカやイノシシも捕獲し、重要な食料の一角をなしていた。土器などに代表される動物意匠の表現から、イノシシ重視の縄文文化、シカ重視の弥生文化を動物意匠の双璧とされる(春成1991・設楽2011など)。朝日遺跡出土の動物骨、シカの土製品、絵画資料を紹介し、弥生人と動物とのかかわりをかんがえてみたい。

本講座では、一色青海遺跡から出土したシカを描いた筒形容器に注目する。筒形容器はヒョウタン写しの容器(吉田2004)とされてきた。容器の系譜はわかっている、使われ方がわかっていない。一色青海例は筒形容器にシカが縦に並んで描かれている。この容器の所作を「容器をシカの腹と見立てて、容器にシカの血と稲穂を入れる」と想定してみた。著名な『播磨風土記』「讃容郡」条の逸話である。

さいごに、縄文人と弥生人の世界観の違いをかんがえる。日本民俗学の村落領域論(福田1980)を手掛かりに、環濠の有無から各々の世界観の相違が具現化し、祭祀形態をも変革させた。

次回は10月22日(土)「古墳のまつり」早野浩二

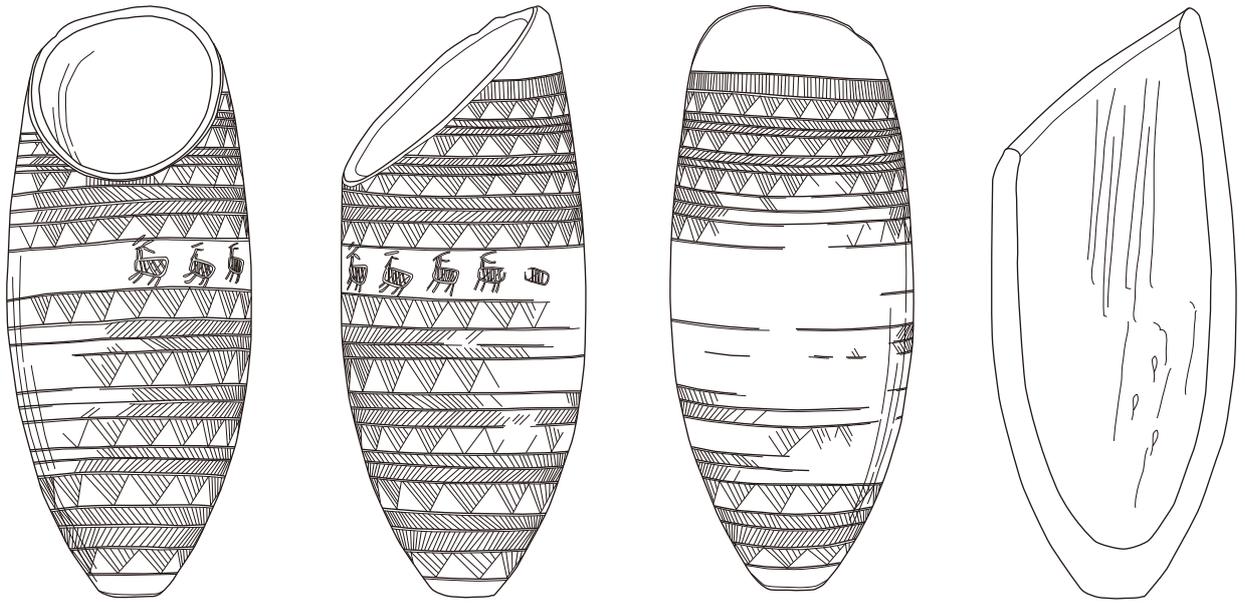
お問い合わせ先



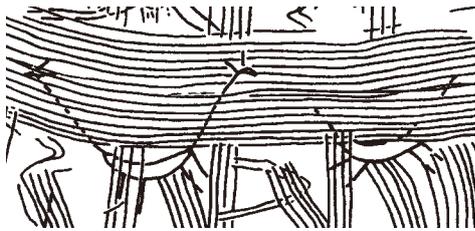
公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24
Tel. 0567-67-4163 Fax. 0567-67-3054
<http://www.maibun.com/top/>

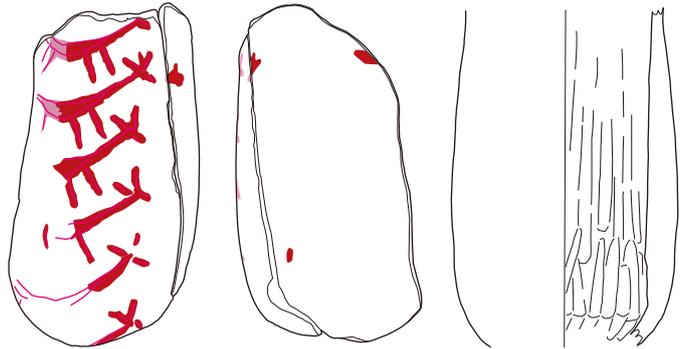




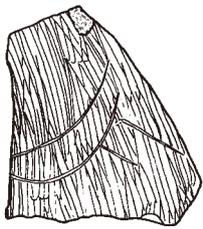
朝日 VIII-05Da-SK63-d034



朝日 V-2075 (部分)



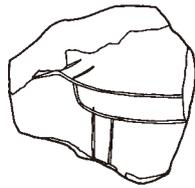
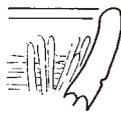
一色青海 09B-1257SK



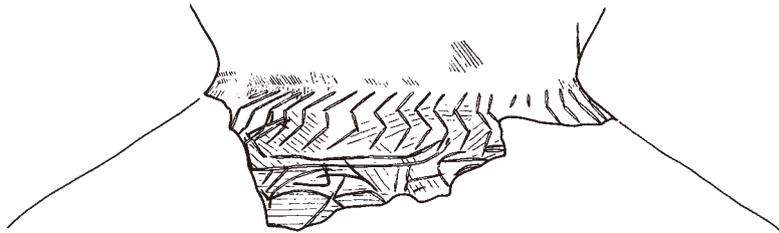
朝日 V-2076



朝日 V-2077



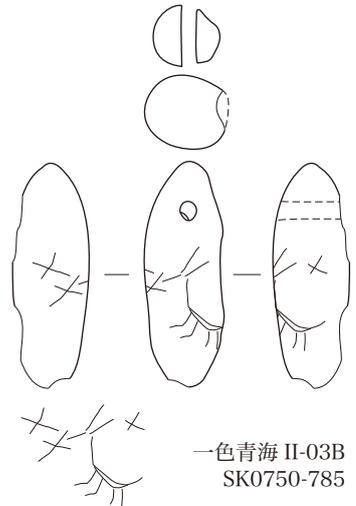
神明 -49



朝日 V-2081

1/2 0 10cm

1/1 0 4cm



一色青海 II-03B
SK0750-785

愛知県内出土の鹿の絵画土器と土製品 (樋上 2010 より引用一部改変)



朝日遺跡出土の鳥形土製品と筒形容器